

花鳥諷詠選集

稲畑汀子選

特選五句

残雪の山に遺れる命綱 西宮 山之口 倫子

雪だるま溶けて上がり目下がり目に 福岡 蓑原 郊 雨

雪晴と云ふ静けさのありにけり 龜山 鈴木 秋翠

六甲を包み込みたる朝霞 西宮 山際 ヨネ子

伐採を余儀無くされし豪雪禍 金沢 篠島 安子

二句短評

一句目― 厳しい冬の登山に挑んだ人の名残の命綱があるのに気がついた。春山も油断はならないが、残されてある命綱には生死を託した人の心が遺されているように思った作者。この命綱がどのような結果になったか。想像が働くが「遺れる」という字が語っている。二句目― 沢山雪が降って大きな雪達磨が出来たのである。その雪も止んで、辺りの雪が溶けると同時に雪達磨も溶けだした。雪達磨の目の表情の変化を捉えて、上がり目、下がり目とは面白い。

入選六十句

弱まりし足春泥に捕まりし 河内長野 橋本 佐智

逢へるなら春寒くとも寒くとも 稲城 福島テツ子

みなどこか欠けたる妣の雛飾る 大阪 久保 達哉

杖をひく身にも春待つ心あり 熊本 池原 倫子

ちよつとだけ優しくなれて梅に佇つ 半田 稲葉 京閑

草の屋に古い三人の雛飾る 上越 橋詰シズエ

麦踏みて命育む躑かな 香川 柴田 禮美

大試験見守るだけに疲れけり 高知 岩佐 とよ

文政の酒蔵を守り寒造 白山 北村 翠波

膨れ来る大地の鼓動厩出し 神戸 石角 節子

大試験てふ大海へ乗りだせる 大分 野村香代子

老妻の二日ばかりで飾る雛 札幌 大槻 独舟

夢あまた見て微睡みぬ春の風邪 京都 山崎 貴子

あたたかやいつでも会へる距離に姉 たつの 竹内 澄子

春雨の静かな一日家居して 伊賀 豊田 礼子

初雷の一喝に村目覚めたる 岩倉 村瀬みさを
 待たされてゐること忘れ春風裡 香川 湯川 雅
 一人居の部屋に余寒のある許り 福岡 長澤てい女
 芽柳のひねもす風でありにけり 高松 島谷うた子
 流し雛目鼻描けばいとほしき 廿日 齋藤 金二
 雨止んで大地しつとり黄水仙 豊後 高田 敏子
 み吉野の杉の木立に残る雪 香芝 芳林 淳子
 ものの芽に雨後のひかりの一つづつ 高崎 吉井たくみ
 池の辺の風受け流す柳の芽 高松 藤岡 孝子
 少しづつ戻る土地勘あたたかし 八千代 向阪 由紀
 大切な友失ひし寒の雨 岡山 児島 倫子
 せせらぎの音に水仙香り来る 鹿児島 白石 白紘
 サツカーボール蹴飛ばして卒業す 東京 高野 虹子
 雪吊の縄解かるるを待つ弛み 石川 駒形 隼男
 春の風邪引きずり予定たたぬ日々 浜田 文野 弘子

脇役といふ春菊の香の厨 姫路 大谷 千華
 梅寒し苑がこんな広いとは 東京 清水千鶴子
 大試験志望一校一学部 洲本 高野 さち
 富士山を空へのこして野焼かな 浜松 朝井 治代
 わが裾に触れんばかりや初蝶来 久留米 谷川 章子
 散りゆくもこれより咲くも梅の苑 久留米 吉田いずみ
 落ちさうで落ちぬ軒端の残る雪 太宰府 野田 杉子
 顔合はすだけで春めく心かな 金沢 宮本三重子
 梅の香や学びの心ふくらみて 長岡 榎本清津子
 一喝し季節を変へる春の雷 高松 宇和川 厚
 青き踏む風新しき回り道 丸亀 片山 千鶴
 余生とは今日のこととも梅に酔ふ 福岡 吉田 文代
 暖かや絵本をめくる幼き手 金沢 三島由紀子
 夜は星のまたたき知らぬいぬふぐり 刈谷 青山 和生
 みよしのの旅は思ひ出西行忌 富士 渡邊伊勢乃

● 岩岡中正 選

特選五句

一棹をさし春風にのせる舟 さぬき原 道子

青き踏むいまだ七万人避難 川崎秋間 玲子

頭より拭く春塵の陶狸 堺森本 祐子

一枝をみ明りとして山菜莢黄 福岡有田 真理子

空のしづけさに触れ来し野火埃 八代山下 しげ人

二句短評

一句目「一棹をさし」と軽く入って、舟を春風にのせると言ったところが大胆。春風に「のせる」という動詞が一句のみことな舞台回しの役割を演じている。手練の技だが、さほどの作爲を感じさせないのは、作者も舟も春風と一つになっているからだ。

二句目「青き踏む」は、人間の足裏が直接大地に触れる、とても大事な季節であって、私たちは「青き」を「踏ん」で大地と一つになり、さらにこの大地の地つぎに居る、今なお被災して我が家に戻れない「七万人」もの避難者となつたのである。

青き踏むいまだ七万人避難 川崎秋間 玲子
 師を送る教へ子の顔暖かし 福岡吉武 草徑
 大雪に欠席多し初句会 上越板垣 柳子
 春めくや人の行き来の多きこと 浜松藤野 靖也
 楓の芽一雨如の芽吹かな 大阪八幡 和子
 雪見舞するもされるも句の縁 北海道高間ヨシエ
 雪洞に灯の入りてより春の苑 稲沢藤本 慈子
 街なかへ大きなリユック山笑ふ 香川中塚 元三
 俳諧の旅寝の朝の蜺汁 福山杉原 芳子
 一人守る庭の広さに春寒し 山口徳田 千鶴
 一邸の庭ことごとく春めけり 神戸内田 泰代
 卒業のまた踏み出せる一歩あり 東京鈴木サキ子
 一刻の激しき雪も春のもの 宮古島鈴木 文代
 風に散り鳥にこぼるる梅の花 我孫子柳沢 いわを
 触るるものなき益梅の白さかな 荒尾大川内 むのる

入選六十句

大空に風の道ある遍路かな 仙台 赤間 学

北窓を開けば土の香の一気 札幌 押野 美江

急逝やまだ色褪せぬ落椿 高槻 小野 晶子

立春の山襷深き蔵王かな 宮城 山家登志子

水動く音より櫛の森の春 長野 鈴木しどみ

次々に声のさざなみ百千鳥 熊本 井芹真一郎

春光に一木一草顔を上げ 東京 青木美代子

水飲みに来て庭先に囀れる 君津 榎本 静江

如月の折鶴折目正しうす 前橋 新木ひろみ

鳥雲に昔炭鋳王の庭 宗像 井上真知子

流されて又流されて残る鴨 西東京 石黒 和

老梅の肘置くやうに支柱して 相模原 木村 享史

さざ波の薄水に来て止まりけり 名張 寺嶋弥生子

大試験てふ大海へ乗りだせる 大分 野村香代子

寝て起きてつひに卒寿や春寒し 龍ヶ崎 小竹 亨

首筋へ音なくすべり込む余寒 七尾 橋本紀美子

降り注ぐ光の粒や春の山 神戸 宮下美智子

春菊のこの香りこそ苦みこそ 横浜 久保 理江

雪晴と云ふ静けさのありにけり 亀山 鈴木 秋翠

うららかや鎌倉は海光る町 阿南 湯浅 芙美

春愁を捨てに来し海荒れてゐし 小樽 伊藤 玉枝

あたたかやいつでも会へる距離に姉 たつの 竹内 澄子

つくづくと偲ぶ人あり梅二月 西宮 柄川 武子

初雷の一喝に村目覚めたる 岩倉 村瀬みさを

水を売ることく白魚売られけり 東京 大和田博道

紅梅の色にはじまる立話 あわら 木幡 嘉子

咲く重さ落つる重さの紅椿 小松 松本 洋美

節分の恵方ときめし子規の町 福山 池上 幸子

土雛に供ふる習ひ金平糖 金沢 吉田みはる

岩の間に神住み給ひ春寒し 大野城 阿比留初見

耕のひとりの影のいつまでも 茨木 田中 光祥
 ものの芽に雨後のひかりの一つづつ 高崎 吉井たくみ
 咲くでなく散るでもなくて冬のばら 福山 世良 正子
 豪雪に生きる生活の蓑と笠 上越 八島三枝子
 雪月花旅したまひて西行忌 芦屋 鎌野 光子
 富士山を空へのこして野焼かな 浜松 朝井 治代
 莖立に急かされてゐる畑仕事 うきは 大力 妙子
 日脚伸ぶ花屋本屋とはしごして 島田 川崎 文代
 行商の媪目刺の臭ひして 柏原 鈴木 輝子
 望郷の麒麟の瞳春の空 神戸 片岡 橙更
 鍋いくつみがきて主婦の二月尽 福岡 佐竹美輪子
 草を摘みながら話してくれしこと 高松 久本 照代
 蝶子締むる遊具点検春隣 鹿児島 永井 紀子
 春障子声の弾める一間あり 成田 阿部ひろし
 まつ青な空の広さを囀れる 横浜 秋吉美佐子

氷上の詩人と言はれメダリスト 福岡 大石 靖子
 千金の雨の朝寝となりにつけり 奈良 和田 富子
 湖の底がまほろば蜷貝 金沢 西田 梅女
 俳諧の旅寝の朝の蜷汁 福山 杉原 芳子
 僧兵の駆けし径とや花すみれ 下関 西野 イチ
 囀や歌垣山の暮るるまで 春日 本田 久子
 舟でゆく花嫁御寮春の水 福岡 工藤 友子
 よく動く子の目の口地虫出づ 福岡 河野 京子
 また今日の色の加はり落椿 大津 磯田ひろみ
 かたくりの花に山の日やはらく 加古川 瀧 積子
 猿山の人気投票山笑ふ 大分 竹下百合子
 春泥の靴どかどかと戻り来る 井原 片山 千代
 胎動の児にも聞かせる初音かな 神戸 小柴 智子
 初蝶の曲りし角を曲りけり 南国 竹村あきを
 残りたるわづかな視野に桜かな 福知山 植村太加成